

土屋健治著

## 『インドネシア』

——思想の系譜——』

勁草書房 1994年 xv+356+x ページ

か のう ひろ よし  
加 納 啓 良

## I

1995年8月17日、インドネシア共和国は生誕50周年を迎えた。旧ソ連邦の解体後、世界第4位の人口大国となったこの国の、統一国民国家としての歴史はなお浅い。人口大国は同時に人工大国としての色合いも濃く、旧ユーゴスラビアで現実起きたような統一国家解体の悪夢への不安と恐怖は、今でもこの国の指導者たちの脳裏に去来しているようにも思われる。統一体としてのインドネシアの国民意識はいつどのように生まれ、成長し、国民国家へと実体化されるに至ったのか。本書は、この問題に思想史の角度から切り込んだ成果である。それゆえ、本書のタイトル『インドネシア——思想の系譜——』の中間には含まれたダッシュの含意は、たんに「インドネシアにおける」思想の系譜」というよりも、「インドネシアの国民意識の成長を育んだ」思想の系譜」と読まれるべきであろう。

さて本書は、著者の土屋氏が過去のさまざまな機会に発表した論考を中心に編成されている。その構成は次のとおりである。なおかつこで示したのは、初出の年次と本書中でのページ数である。

## 第1部 インドネシアの成立

## 第1章 インドネシアの成立

(1991年, 35ページ)

## 第2章 ナショナリズムとその言語空間

(1990, 87年, 21ページ)

## 第3章 ロングワルシトとカルティニ

(1990年, 23ページ)

## 第2部 ナショナリストの営為

## 第4章 ナショナリズムの流れ

(書き下ろし, 22ページ)

## 第5章 スカルノとハッタの論争

(1971年, 一部書き下ろし, 61ページ)

## 第6章 民族文化の構築

(1981年, 一部書き下ろし, 22ページ)

## 第7章 スカルノのイスラム論

(1972年, 43ページ)

## 第8章 スカルノの第二次世界大戦論

(1972年, 26ページ)

## 第3部 独立国家の国家原理

## 第9章 パンチャシラ国家論

(1989年, 一部書き下ろし, 45ページ)

## 終章 知識人の運命

(書き下ろし, 45ページ)

各章で論じられている問題の要点は、次のとおりである。

第1章、インドネシアという政治的共同体と国民国家の成立過程の巨視的概観。この地域にかつて存在した2つの伝統国家群（海域世界の港市国家とジャワの農業国家）の植民地化の進行による変容過程。「オランダ領東インド」という植民地国家の出現と、官僚制および国家統合のネットワーク（とくに交通・通信網）の整備、都市の成長。ナショナリズムと「20世紀の時代精神」としての「人民主義」の登場および文化統合の進展。以来数十年を経て、独立後の現在における統合ネットワークの高度化と官僚制の肥大化、国軍支配などによる過剰国民統合とも呼ぶべき状況の対比。

第2章、「想像の共同体」（B・アンダーソン〔Benedict Anderson〕）としてのインドネシア国民観念の創出過程。植民地下の教育制度による知識人層の成立。「伝統と近代、アジアと西欧、支配と抵抗などの二項対立の世界」と同時に「西欧の言語と自らの言語」という「バイリンガルの世界」を生きる知識人が、その「緊張と対立」の中から「インドネシア」という観念を生み出し育んだゆえん。

第3章、「物語」＝「話し言葉」の世界に生きたジ

ジャワの伝統的知識人の最後の代表者であった悲劇の宮廷詩人ロンゴワルシト (Raden Ngabei Ranggawarsita : 1802~73年) と、二重言語状況の拡大から生まれた近代精神の先覚者としてのカルティニ (Raden Ajeng Kartini : 1879~1904年) の対比。

第4章、オランダの近代的植民地政策 (倫理政策) 実施をきっかけとするナショナリズムの誕生と、ブディ・ウトモ、イスラム同盟、東インド党、共産党、国民党の順で指導権が推移したその政治的成長過程。

第5章、ナショナリズムの旗手としてのスカルノ (Sukarno) の登場の意味と、国民党解散 (1931年) 後に運動再建の道筋をめぐって闘わされたスカルノとハッタ (Muhammad Hatta) の論争の紹介および意味づけ。論争は、党組織、統一戦線、対オランダ非協力政策などの具体的問題をめぐって行なわれたが、その根底には、「自然」の勢いによる「ラディカル」な「大衆行動」を重視するスカルノと「理性的な闘争方式」を重視するハッタの思想体質の差異、オランダ社会総体を「こちら」とは異なる「あちら」の世界と見なすスカルノとオランダ内の社会主義者との連携を重視するハッタの「対オランダ観」の相違が横たわっていた。

第6章、1930年代後半に知識人たちによって繰り広げられた「文化論争」の意味づけ。近代の産物としての「インドネシア」と伝統的「前インドネシア」とを峻別し「和魂洋才」的折衷論を拒絶する近代派アリシャバナ (Sutan Takdir Alisjahbana) と、寄宿塾 (プサントレン) に代表されるジャワ的伝統の再生を通じた「近代の超克」を目指すデワントロ (Ki Hajar Dewantoro) を両極端の論客とするこの論争は、弾圧による政治運動の退潮とは裏腹に、将来の国民国家についての理念の成熟に大きく貢献した。

第7章、フローレス島のエンデとスマトラ島のベンクルーでの合計8年間にわたる流刑生活 (1934~42年) の期間にスカルノが、改革派イスラムの指導者たちとの往復書簡を通じて展開したイスラム論の紹介と意味づけ。進歩史観と「理性主義」の立場からイスラム社会の立ち遅れを批判し、民族主義の時代精神による再生とトルコを模範とする政教分離国

家の建設を目標として示した。

第8章、ベンクルーでスカルノが書き残した、来るべき「第二次世界大戦」への予見的考察の紹介と意味づけ。戦争の本質を資本主義列強間の「資源獲得競争」としながらも、ファシズムの敗北を予見し、またインド独立の可能性を論じた。日米間の太平洋戦争勃発とインドネシアがそれに巻き込まれることも予見し、心中インドにインドネシアを重ね合わせつつ、独立への好機の到来に思いを巡らした。

第9章、1965年の9月30日事件を経て成立した現スハルト政権のもとでのパンチャシラ (建国五原則) の国家イデオロギーとしての顕揚と社会への浸透過程の分析。1978年の国会決議「パンチャシラの理解と実践のための指針」にもとづく学校での「パンチャシラ道徳教育」および公務員への「パンチャシラ研修講座」の内容分析を通じて、パンチャシラの「国学」化とイデオロギー的内向化を指摘。

終章、「ナショナリストの営為」としての「思想」の系譜の整理と、現在のインドネシア知識人が置かれている知的状況および将来への課題の展望。植民地期の抵抗運動としての「下から」のナショナリズムが、国家による「上から、中心から」の「公的ナショナリズム」に変貌した結果、「国家の国民への優位」と「知の逼塞」、言論統制の強化によるジャーナリズムの非政治化という知識人にとって厳しい状況が生まれている。しかし、東ティモールにおける軍の虐殺事件、労働問題の顕在化などを通じて変化の兆しが現われている。現政権が総力を挙げて追求してきた「開発」の成果そのもの、とくに「情報の開放系」が思想の「国際化」を促しつつある。21世紀は「国民国家の運命が厳しく問われ」る時代となろう。宿命的孤独に耐えて「インドネシア国家の行方を見届ける」のが次の世紀の知識人の課題であろう。

## II

以上の雑駁な要約からも窺われるように、本書は100年を超える時代について、実に多くの問題を扱っている。執筆時期から見ると本書は、(1)1971~81

年の著者の青年期の開拓的諸論文、(2)1989～91年の円熟期の啓蒙的エッセイ、(3)本書のために新たに書き下ろされた部分、の3つの層の巧みな連結によって構成されている。また、主に取り扱われている時代としては、(1)19世紀末～1910年代（国民意識の萌芽期）、(2)1920～30年代（国民意識の成長期）、(3)1965年～現在（国民国家の確立期）、という3期を挙げることができる。ナショナリズムの揺籃期と国民国家の成熟・肥大化した現状とをあえて直接的に対比することによって、両者の歴史的意味を浮き彫りにするという手法を採ったものと考えられる。理論的に見れば、全体を通奏低音のように貫通しているのは、コーネル大学にあって主に文化主義的アプローチによるアメリカのインドネシア研究をリードしてきたアンダーソンに示唆を受けた、「想像の共同体」論であろう。そして以上のかかなり混み入った仕掛けは、本書をひとつの主題のもとにまとめあげることに十分成功したように思われる。その際、ひたむきな知的情熱に支えられた著者のあの独特の筆力が果たした役割も、また決して無視できないものがある。

次に、評者の観点から、若干の異論を含む批評を加えたい。

すでに指摘したように、「バイリンガル」すなわち「二重言語状況」に生きる知識人の登場がナショナリズムの誕生と成長の培養基となったと、著者は繰り返し指摘している。例えばカルティニについては、「生得のジャワ語の言語世界と、習得し習熟したオランダ語の言語世界の二つの世界の間を往来し、そこを同時に生きた」（78ページ）とされている。しかし、ことナショナリズムが成長してくると、インドネシアの知識人が生きる言語世界は、(1)ジャワ語、スダ語、ミナンカバウ語等々、生来の地方語の言語空間（語り言葉の世界）、(2)新たに国語としての地位を与えられ磨きをかけられたインドネシア語（ムラユ語が母体）の言語空間（書き言葉の世界）、(3)普遍的価値・観念への通路としての国際語（オランダ語、英語、アラビア語等々）の言語空間、の3層へとより複雑に分岐せざるを得なかったはずである。この3つの異なる言語空間・観念世界の間にと

のような関係を組み立てるかという問題には、たんなる「二重言語」の場合よりも複雑で多様な解が生じうる。それは、あるべき国民国家の姿についての構想にも反映されることになったであろう。もちろん、インドネシア研究者にとっては初歩的な知識に属するこの事実を著者が知らなかったことはありえないのだが、そのことを思想史の方法論ないし枠組みに関わる問題としてどこまで取り込みえたかには疑問の余地があるように思われる。

著者の思想史整理のもうひとつのキーワードは、「西欧近代」派（文化人ではアリシャバナ、政治家ではハッタに代表される）対「伝統回帰派」（文化人ではデワントロ、政治家ではスカルノ）という二分法である。著者によれば、後者こそがインドネシア・ナショナリズムの正系と見なされるのに対して、前者はいわば異端児として位置づけられる。この整理法は、われわれ日本人の観察者にとってはきわめて受け入れやすいものであると同時に、インドネシアの現政権の公式の歴史解釈の立場とも一定の親和性をもつ。思想の表層を見るかぎり、この二分法には異論の余地はないように見える。だがここで問題なのは、「伝統回帰」という場合の「伝統」が実はインドネシア一般ではなくジャワの「伝統」を意味する場合が少なくないように思われることである。アリシャバナらが「インドネシア精神」とは過去から断絶した20世紀の時代精神であると強調して「伝統回帰」派に対抗した（176～177ページ）のも、それゆえであろう。もし「伝統回帰」の主張が、ジャワの基層文化（と了解されたもの）を規範として国民文化、国民国家を造形しようとするものと認知された場合には、ジャワ語の言語空間と基層文化圏の外で育った知識人、またはそこからの脱出を望む知識人たちに抜きがたい違和感をもたらすのは当然である（ちなみに、ハッタもアリシャバナもジャワ族の出身ではない）。

両派の対立（と見えるもの）の根底に潜むのは、実はこの問題、つまり上に述べた3つの言語空間に即して言うと、第1層と第2層の間にどういう橋を架けるか、またその際に第3層から取り込まれた普遍的概念、価値はどういう役割を与えられるのか、

という問題なのではあるまいか。この場合、非ジャワ系の知識人にとって最も容易かつ強力な対抗の方法は、西欧近代であれイスラムであれマルクス主義であれ、世界文明に連なる普遍価値を自己の思想の正面に押し出すことであったと想像するのは難しいことではない。表層に押し出された対立の構図は「近代」対「伝統」という二分法のように見えても、その背後にはもっと複雑な、いわば三次元的な問題構造が潜んでいるのではなからうか。

両派の対抗は、ナショナリズムの形成期から今日まで連綿として続き、著者自身が正当にも認めているように、思想発展のダイナミズムの根源を形成してきた。この状況は、インドネシア国民としての共同意識が解体しない限り将来も続くであろう。それは言ってみれば、同じインドネシア国民がもつ2つの異なる顔なのである。かつて評者はインドネシア留学中に、ある雑誌に次のような逸話が掲載されたのを目にしたことがある。1950年代末にときの副大統領ハッタが大統領スカルノと対立して下野し、スカルノ-ハッタ (Sukarno-Hatta) は「二者一体」とまで呼ばれた両者の提携が崩れたとき、ジャカルタの下町の、とある小路の壁に“Sukar-No-Hatta!” (ハッタがいなければ難しい) と語呂合わせの皮肉を大書した落書きが現われたというのである。他方、没後にハッタを記念して設立された財団 (Yayasan

Hatta) が、首都ジャカルタでも彼の生地西スマトラでもなく、ジャワの文化伝統の一方の中心と目されているジョクジャカルタに事務所を置いていることも、なにか示唆的な事柄のように評者には感じられる。インドネシアという国民国家の存立にとって、ハッタのような非ジャワ系知識人指導者 (より正確には、そういう人々に象徴される思想形成要素) の存在は必要不可欠なのであろう。とすれば、「国民国家」の確立と「正統」派の勝利宣言によって、インドネシアの思想史、国民史が完結したわけではむろんありえない。

終章において著者は、このことを事実上承認したうえで21世紀へ向けての氏自身の思索と研究の課題を再設定し、次の著述へと新たな知的エネルギーの蓄積を開始されていたように評者には読み取れる。だが不幸にして、本書のあとがきを書き終えたばかりの1994年9月に著者は病にたおれ、翌95年2月、多くの人々に惜しまれつつ不帰の旅路に立たれてしまった。もし著者が健在であったならば、評者は上記の疑問をぜひ直接ぶつけてみたかった。思想史や政治史には素人の評者の設問など、著者に軽くいなされてしまったかも知れないが、それでもあえてそうしてみたかったという思いが残る。が、それも今はかなわぬ夢となった。今はただ、著者のご冥福を祈るばかりである。合掌。

(東京大学東洋文化研究所教授)